

認め合い，助け合う人間関係づくり

～ 構成的グループ・エンカウンターを通して～

那覇市立大道小学校教諭 城間 麻愉巳

テーマ設定理由

近年，少子化や核家族化が進み，子どもたちが人とふれあい、かかわり合う体験の不足が指摘されている。子どもたちのコミュニケーション能力や人間関係を築く力の低下，人間関係の希薄化は子どもの豊かな人間性や社会性の発達に大きな影響を与えている。学校現場においても、いじめ，不登校，学級崩壊といった様々な教育問題が生じている。

「小学校指導要領総則編」では，「指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」の中で，「日ごろから学級経営の充実を図り，教師と児童の信頼関係及び児童相互の好ましい人間関係を育てる」こととし，集団を通して様々な教育活動が行われる学級の人間関係の重要性を示している。担任教師は様々な角度から児童理解を行い，児童との信頼関係づくりやよりよい学級集団づくりに取り組んでいる。

しかし，学級内の人間関係が担任教師の思いとは逆の方向へ行くときもある。平成 15 年度の文部科学省の調査「生徒指導上の諸問題の現状について」によると，いじめの発生件数は 6,051 件となっており，前年度 5,659 件を上回った。また，同調査における，「いじめ発見のきっかけ」では，担任教師が 25.8%であった。依然として多数のいじめが発生していることや，日々，子ども達と共に過ごしている担任によるいじめの発見が 3 割以下という結果から，学級内の人間関係づくり，正確な実態把握は学級経営において大きな課題であると考えられる。

私もこれまでに，いじめへの対応が遅れ問題を深刻化させた経験がある。児童の内面に目を向けたより深い児童理解と教師と子どもの信頼関係づくりや子ども達のふれあいのある人間関係づくりを意図的・計画的に実践していく必要性を強く感じた。

そこで，今回は実態把握において客観的で多面的な資料が得られる「たのしい学校生活を送るためのアンケート Q - U」を活用して児童理解を深め，問題の早期発見をおこない，児童に合った個別的な支援や学級に合った構成的グループ・エンカウターの授業を効果的に実践することで，認め合い，助け合いのある望ましい人間関係を育てることができると考え，本テーマを設定した。

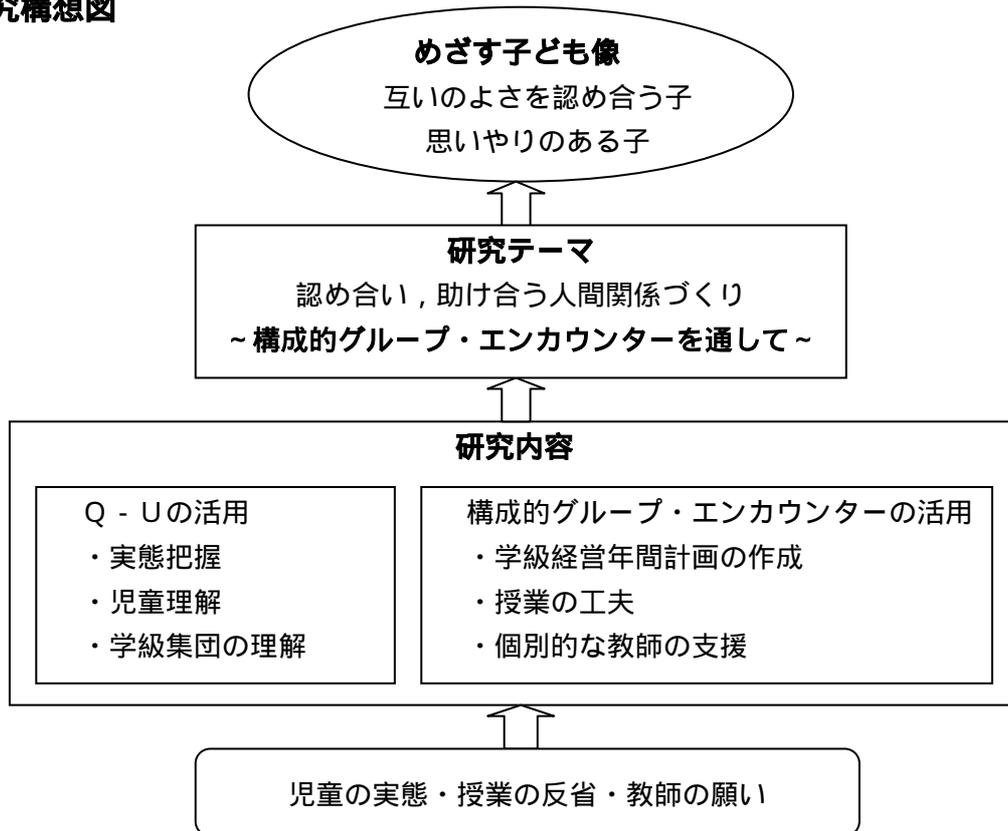
研究目標

学級の実態に合った構成的グループ・エンカウターの実践を通して，認め合い，助け合うことのできる人間関係づくりを研究する。

研究方針

- 1．Q - Uを用いて実態把握を行い，児童や学級集団の理解を深める。
- 2．構成的グループ・エンカウターを活用した授業を工夫する。
- 3．児童に合った個別的な支援の仕方を工夫する。

研究構想図



研究内容と方法

1 認め合い, 助け合う人間関係づくりとは

認め合い, 助け合う人間関係とは, 教師と子ども, 子ども同士が互いに理解し, 相手の個性を認め, 協力して活動できることであると捉える。

学級は一人ひとりの子どもが, 担任教師や友達と「出会い」「ふれあい」「学び合い」を通して成長していく場であり, そのような場づくりが学級経営の大きなねらいである。担任教師は一人一人の子どもを多面的に理解し, 個別的な対応を適切に行い, 子どもとの間に信頼関係を築くことが必要である。また, 子どもがいろいろな友達と関わり合う機会を設定し, 友達関係を広げていく楽しさを味わわせ, 一人一人の子ども同士をつないでいくことも教師の大事な役割である。自他の違いを知り, 互いのよさを認め, 協力し合うことにより, 相手を尊重し, 思いやりの心を持って関わり合える人間関係を築くことが大切であると考え。

そこで本研究では, 学級経営において, ふれあい体験を通して人間関係の形成を図ることのできる構成的グループ・エンカウンターを活用し, 学級における認め合い, 助け合う人間関係づくりを図りたい。

2 構成的グループ・エンカウンターを生かした学級経営

学級経営に構成的グループ・エンカウンターを取り入れることは, 子どもたちの心を育て, 学級を単なる個人の集まりから個々の子どもを結びつけ, 学級として一体感をもつ集団へと成長させることに有効である。「教育力のある学級集団を育成することが, 一人一人の育成につながり, 一人一人への対応は学級集団を育成することにつながっていく」というエンカ

ウンターの原理を学級経営に生かすことにより、認め合い、助け合う人間関係の育成を図ることができる考える。

(1) 学級集団の発達

対人関係がうまくとれず、集団への参加が苦手な現代の子どもたちが自然に集団を形成することは難しい。そこで、担任教師が積極的に集団づくりを支援することが必要である。

個人と集団は相互に影響し合いながら成長しているため、集団に影響を与えている要因を見つけ、方向づけをすることで学級を目標とする状態に導いていくことができる。従って、学級集団づくりでは、教師と子ども、子ども同士のふれあいのある人間関係づくりを通して一人一人の心を育てるとともに、教師や子どもたちを結びつけ集団として成り立つためのルールやマナーを確立することが重要となる。

集団の成長には段階があり、構成的グループ・エンカウンターを活用する際には、学級集団の発達段階を考慮することが大切である。(表1) 集団の発達段階の中で現在の学級の状態をとらえることにより、学級経営における集団づくりを意図的・計画的に進めることができる。目指す発達段階を、低学年は中期、中学年は後期、高学年は完成期におくと、無理のない学級づくりができる考える。また、集団は個々を結びつける要因がなくなると逆行するため、教師は常に集団の状態を把握し、適切な対応していくことが必要である。

表1 学級集団の発達

発達段階	学年	集団の構成	集団の特徴
初期	低中高 ↓ ↓ ↓	2～3人単位	<ul style="list-style-type: none"> ・友達関係が内に閉じ、孤立している子が何人もいる。 ・学級集団に対する不安が強い。 ・教師との1対1の関係を強く求める。
中期	↓ ↓ ↓	4～6人の小集団が乱立	<ul style="list-style-type: none"> ・集団初期の規模が拡大したもののだが、小集団の核になる子は初期とほとんど変わらない。 ・他の小集団と争うことで小集団の結束を高めようとする場合がある。
後期	↓ ↓ ↓	10人前後の中集団	<ul style="list-style-type: none"> ・よく見られるのが、男子全体のグループと女子全体のグループである。 ・男子対女子の対立が起きやすい。
完成期	↓ ↓ ↓	学級全体が一つにまとまっている	<ul style="list-style-type: none"> ・教育力のある理想の学級集団である。 ・学級を子どもたちが主体的に運営できる。

河村「学級づくりの年間計画」より

(2) 構成的グループ・エンカウンターを生かした学級経営の年間計画案

学級集団の発達段階を考慮し、初期から中期、中期から後期へと学級内のふれあいのある人間関係を徐々に広げ、認め合い、助け合う人間関係づくりができるよう計画した。

認め合い、助け合う人間関係づくりの年間計画... 中学年

月	エクササイズ名	ねらい	概要	場面	種類
4月	聖徳太子ゲーム	1人では難しいことをグループの協力によって成し遂げる体験をする。	グループにわかれ、代表チームのメンバーが1人1音ずつ同時に発音する言葉を聞き取る。 (初期)	学活	信頼体験

5月	ブレンストーミング)	何を言っても批判されない、安心できる雰囲気を経験する。	グループで「新聞紙の使い道」について、思いつく限りの案を考え出し合う。 (初期)	総合	自己理解 他者理解
6月	ほめほめ大会	友だちのよさを見つける受容的な学級づくり。	友達のいいところをカードに書く。書いたカードを交換し合う。 (初期)	学活	自己理解 他者理解
7月	がんばり賞あげよつと!	よいところ、すばらしいところを認め合い、自尊心を高める。	友達のよいところをさがし、何賞をあげるか考える。賞状をつくって表彰する。 (初期から中期へ)	学活	自己理解 他者理解
9月	サイコトーク	級友の話を通して、互いに認め合い、自分との共通点を発見する。	半円になって座り、1人ずつ前に出てテーマが書いてあるサイコロを振り、出たテーマについて全員の前で話をする。 (初期から中期へ)	国語	自己理解 他者理解
10月	たたかい終えて	チームのすばらしさをたたえ合い、運動の楽しさを体験的に得る。	試合後、対戦チームと合同で反省会をし、相手のいいところ、自分たちの努力点を話し合う。 (中期)	体育	信頼体験
11月	無人島SOS	自分の考えを友達に伝え、多様な考えがあることを知る。	無人島で生き抜くため、または脱出するために必要な道具を8つ選ぶ。選んだ理由を発表し合う。 (中期)	総合	自己理解 他者理解
12月	自分への手紙	自分で自分をほめることの楽しさを知る。	2学期にできるようになったことを書き出し、頑張った自分に手紙を書く。 (中期から後期へ)	学活	自己受容
1月	共同絵画	非言語コミュニケーションを体験することであたたかな人間関係を作る。	グループで言葉をいっさい使わずに共同で絵を描く。1人が1つのものを描き、順番が回ってくるようにする。 (後期)	図工	感受性
2月	してあげたこと・してもらったこと	人は自分以外の人との関係で生きていることを実感する。	生まれてからこれまでに、自分が人にしてもらったこと・人にしてあげたことを思い出し、ワークシートに書き、発表する。 (後期)	道徳	自己理解 他者理解
3月	別れの花束	肯定的な評価をもらうことで、あたたかな人間関係をつくる。	活動を共にした4・5人のグループで、その人のいままでの活動でよかったところを教える。 (後期)	学活	自己理解 他者理解

3 実態把握

構成的グループ・エンカウンターを活用するためには、子どもたちの学級への満足感、子どもたちの人間関係、学級内のルールの定着度の3つの視点から実態を正しく見極めることが大事である。そこで、本研究では、実態把握のための3つの視点を押さえられ、信頼性・妥当性の確かな「楽しい学校生活を送るためのアンケートQ-U」の2つの質問紙、「学校生活意欲尺度」と「学級満足度尺度」を用いて学級の実態把握を行う。

(1) 学校生活意欲尺度の結果

学校生活意欲得点の高低と「友達関係」「学習意欲」「学級の雰囲気」の3領域のバランスから、児童の学校・学級での集団生活ないし諸活動に対する帰属感や満足感を把握することができる。

本学級の学校生活意欲総合得点は学級平均 27.3 点で全国平均をわずかに上回った。3領域のバランスも全国平均と大きな違いはみられず、平均的な学級である。(図1)

学校生活意欲群別の人数をみると、総合得点が 29 点以上の高意欲児童群は 9 人、22 点以上 29 点未満の中意欲児童群は 17 人、21 点以下の低意欲児童群は 1 人で、学級の約半の児童が中意欲児童群に属していることがわかった。(図2)子どもの意欲は教師との関わりや友達との関わりによって大きな影響を受ける。学級内の望ましい人間関係の形成によりさらに児童の意欲を高めていきたい。

(2) 学級満足度尺度の結果

学級満足度尺度では、縦軸を承認得点、横軸を被侵害得点とし、「学級生活満足群」「非承認群」「侵害行為認知群」「学級生活不満足群」4つの群に児童に分け、児童の学級に対する満足感や学級集団の状態を把握することができる。(図3)

本学級の各群の出現率は、全国的な傾向と大きな違いはみられない。満足群は約3割、満足群以外の児童は約7割であった。分布図をみると全体的にばらばらな分布となっており学級の凝集性が低く、子どもたちの学級に対する感情がそれぞれ違う状態であることが考えられる。子どもたちが小集団ごとに固まり、グループに入れない児童は孤立していると思われる。また、非承認群の児童が全国より少し上回っていることから、子ども同士のリレーション(ふれあいのある人間関係)が弱いことが考えられる。学級内の緊張感をほぐし、ふれあいのある人間関係を形成していきたい。

個別の児童に着目してみると、要支援群に属し学級内で孤立し友達からのサポートも得られていないと感じている児童や、被侵害得点が高いいじめや悪ふざけを受けていると感じている児童があり、これらの児童に対する積極的な働きかけが必要である。

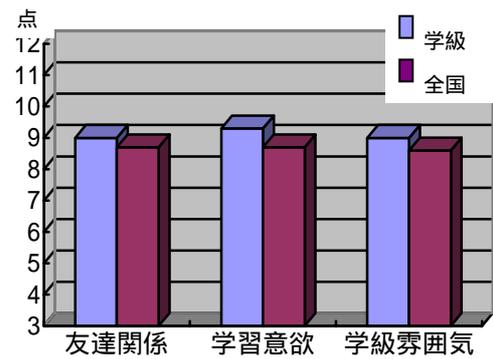


図1 領域別の学校生活意欲得点

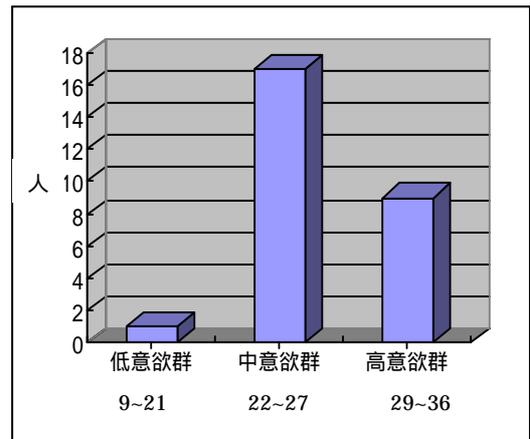


図2 学校生活意欲群別の人数

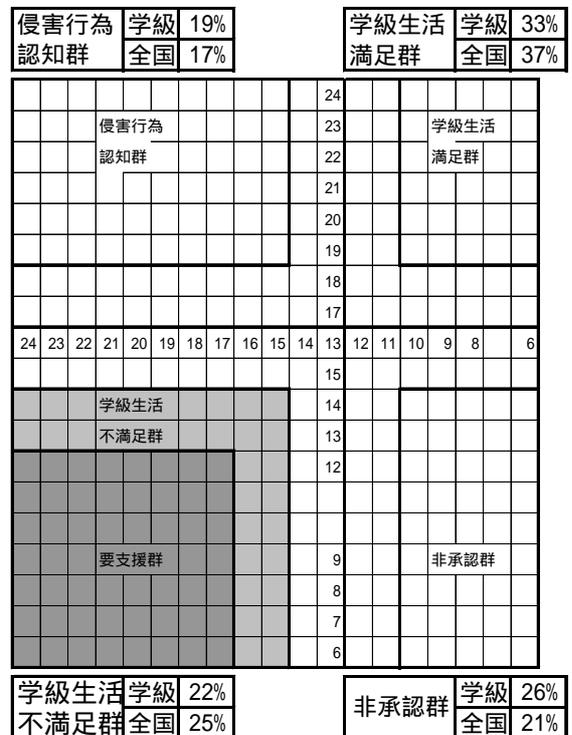


図3 学級満足度尺度分布図(4月)

4 児童に合った教師の個別的な支援

学級は一人一人持ち味の違った児童で構成されている。学校生活全般を通して、一人一人の児童をよく見つめ望ましい方向に向ける個を大切にしたい指導が重要である。教師は常に、子ども一人一人とどのようにかかわるかを考え、子どもの話をよく聞き、その気持ちを十分に受けとめ、相手の言葉に共感することが大切である。個に応じた教師の個別的な支援を行うことによって、学級の望ましい人間関係を育成していくことが必要である。

児童の学級への満足感に応じた教師の個別的な支援

群	児童の特徴	教師の個別的な支援
学級生活満足群	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめや悪ふざけを受けている可能性が低く、学級内に自分の居場所があり、意欲的に取り組んでいる児童。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個別に配慮する必要性は少ないが、廊下であったときや、ちょっとしたときの言葉をかけ続ける。 ・意欲ある活動を認め、より広い領域で活動できるよう支援する。
非承認群	<ul style="list-style-type: none"> ・不適応感やいじめを受けている可能性は低いが、学級内で認められることが少なく、自主的に活動しようという意欲が乏しい児童。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習や活動への取り組みに対する意欲を喚起する。 ・意識して小さな頑張りを見つけその都度ほめる。 ・授業や学級活動などで、級友から認められる場面を意識して設定する。 ・係活動やグループ活動でリーダー的な役割を与え達成した経験を積ませる。
侵害行為認知群	<ul style="list-style-type: none"> ・対人関係でトラブルをかかえている可能性が高い児童 ・自主的に活動するが自己中心的な面がある児童 ・被害者意識が高い児童 	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども同士の対人関係の調整を中心に配慮する。 ・友達とのトラブルの原因を友達関係一般の問題として、みんなで話し合っ気づかせる。 ・トラブルがあった場合、教師は中立の立場で、両者の言い分や感情が交流できるようにする。 ・個人面談をしてトラブルの内容について話し合い、相手の気持ちを考える視点を与える。
学級生活不満足群	<ul style="list-style-type: none"> ・堪えがたいいじめや悪ふざけを受けている、不適応になっている可能性の高い児童。 ・児童自身の不安傾向が非常に強い児童。 ・いじめ被害の可能性や不登校に至る可能性の高い児童。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日常観察を重点的に行うようにする。（特に休み時間や掃除の時間、下校の様子など） ・子どもの不安や緊張を軽減させるために、教師は常に味方であるというメッセージを示しながら、言葉かけをこまめに行う。（交換日記などもよい。） ・個別面接で児童が本音を語りやすいように配慮し、子どもの不満や考えをじっくり聞く。 ・いじめや不登校傾向が認められたら、具体的な対応方法を児童と話し合い、実施を約束してから関わる。 ・全体活動をさせる前に、個別に特別な対応をする。 ・授業や学級の活動などで学級全体で活動をさせるときは、事前に様子を聞き、個人的に援助する。

授業実践

1 題材名 「ほめほめ大会」

2 題材について

(1) 題材観

本題材は、友達のいいところをカードに書いて伝え合うエクササイズである。お互いのよさを認め合う体験を通し、他者肯定感や自己肯定感を高めるとともに、友達への信頼感を育て、支持的・受容的な学級の雰囲気をつくることをねらいとしている。

本学級で「ほめほめ大会」を行うことにより、友達へのあたたかい目が養われ、お互いの存在の大切さが認識できると思われる。また、友達からの肯定的なメッセージを受け取ることによって自尊感情を味わうことができるであろう。学級の凝集性を高め、非承認群や不満足群の承認得点を引き上げ、互いに認め合う人間関係の育成ができると思う。

(2) 児童観

本学級の児童は明るく全体的におだやかである。Q - Uの「学級は明るく楽しい感じがする」の問いに「とてもそう思う」「少しそう思う」と答えた児童は90%以上であった。しかし、「クラスの人から認められることがある」の問いに「全くない」と答えた児童は33%で、全国の14%をかなり上回った。このことから、学級の明るい雰囲気の中で、自分をうまく表現できずに、友達との距離を感じていると考えられる。

児童はこれまでに、友達に興味を持ちいろいろな面を知ることのできる「質問ジャンケン」やルールを守って楽しく活動する「何でもバスケット」を体験している。これらの活動で集団や友達と関わることへの不安は軽減され、本時の互いのよさに目をむけるという内面に一歩踏み込んだエクササイズを抵抗なく実施できると思われる。

(3) 指導観

否定的な内容を書くことがないように、カードの内容は十分子どもたちに理解させるようにする。友達を肯定的にみる視点を多く与え、大げさなことだけではなく、日常のささいなことでもよいとし、できるだけたくさんの友達のよいところを見つけさせるようにする。抵抗を示している子がいないか、児童一人一人の様子を把握し、各児童に合った対応ができるようにする。カードを渡し合うとき、カードの数が少ない児童には教師からカードを渡し、カードの枚数にあまり差が生じないように配慮する。シェアリングでは、振り返る視点を「友達のよさをみつけた時の気持ち」と「ほめほめカードをもらった時の気持ち」に絞り、友達のよさ、自分のよさに気づくことができるようにする。

3 本時の活動

(1) 目標

友達のよいところを見つけ、カードに書いて伝えることができる。

自分のよさに気づき、自己肯定感を高め、自尊感情を味わう。

(2) 具体的な手立て

ウォーミングアップとして、相手のよいところを言葉で伝え合う活動をすることで、学級の雰囲気が和み、カードを書く活動がやりやすくなるだろう。

インストラクションのとき、友達のよさを捉える視点を多く与え、書き方の例を提示することで、カードの内容を深めることができるであろう。

(3) 本時の展開

場面	主な学習活動	教師の支援・評価	資料
導入 10分	<p>1. 本時の活動の説明 教師の話聞き、活動内容とねらいを理解する。</p> <p>2. ウォーミングアップ 「ほめほめタイム」 ペアの友達のよいところを互いに一つほめる。(中央)</p> <p style="text-align: center;">黒板</p> <div style="text-align: center;"> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習のねらいを理解させる。 ・受容的な雰囲気づくりを行う。 ・「ほめほめタイム」の説明し、教師がモデリングをする。 ・相手がいやがることは言わないことを約束する。 ・自分たちでできないところは教師が介入し、児童の代わりにやってみせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ほめほめ大会」の題字 ・めあて1の表示
展開 25分	<p>3. インストラクション 「ほめほめカード」の書き方を説明する。(中央で)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・提示資料を用いて、台紙の使い方、カードの書き方、書く相手、時間について説明した後、台紙1枚、カード10枚配布。 	<ul style="list-style-type: none"> ・台紙 ・カード(拡大) ・書く順序
	<p>4. エクササイズ(各自の席)</p> <p>(1) 友達のいいところをみつけてほめほめカードに書く。</p> <div style="text-align: center;"> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ほめほめカードを友達に渡す。 <p>(2) ほめほめカードを読む。 (各自の席で)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・肯定的なメッセージを伝える内容を書くように声かけをする。 ・早く書けた子のカードをほめながら紹介し、まだの子のモデルにする。 ・なかなか書けない子には話をしながら、その子の思いをくみとり助言する。 ・カードが少ない児童には、教師がカードをあげ、枚数にあまり差がでないよう配慮する。また、何枚もらったかを競争するような状態にならないよう助言する。 友達のよいところを、カードに書いて伝えることができたか。 自分のよさに気づき、友達に受け入れられている喜びを味わうことができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・カードの例文 ・めあて2の表示
終末 10分	<p>5. シェアリング(中央)</p> <p>カードをもらって、嬉しかったこと、初めてほめられたことを発表する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・感じたことを自分の言葉で話せるよう援助する。 ・発表者と同じ気持ちの人を挙手させ、感想を分かち合う。 	
	<p>6. まとめ(各自の席)</p> <p>(1) 振り返り用紙に感想を記入する。</p> <p>(2) 感想を発表する。</p> <p>(3) 教師の話聞く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・机を中央に向かせ、聞く状態を作り、個人の感想を学級で共有できるようにする。 ・書けない子には活動を振り返らせる声かけをする。 ・児童の活動に取り組む姿勢を評価する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・振り返り用紙

結果と考察

検証 1

学級の実態に合った構成的グループ・エンカウンター授業を工夫することにより、自他のよさに気づき、認め合う人間関係を育むことができるであろう。

【手立て 1】ほめほめカードの内容を充実させる工夫

【結果】友達のよさを捉える五項目を視点とし、図 4 の提示資料を作成した。10 分間で一人平均 3.7 枚、一番多い子は 7 枚、全員で 100 枚のほめほめカードを書くことができた。図 5 は児童が書いたほめほめカードの例である。ほめほめカードの内容を分類してみると、「上手なこと」が全体の約半数を占め、学習に関する内容が多かった。(図 6)

友達への感謝	・ のとき、 してく れたね。ありがとう。	→ 「えんぴつや消しゴムをわすれたとき、かしてく れてありがとう。」(学習面・思いやり)
友達の努力	・ のとき、 してが んばっていたね。	→ 「きらきらボックスの下絵をかいているとき、細 かいの書いてがんばっていたね。」(技能)
すごいところ	・ のとき、 してい たね。すごいな。	→ 「テストのとき、いつも 1 番ですごいなと思いま した。」(学習面)
上手なこと	・ のとき、 が上手 だと思ったよ。	→ 「バレーが上手だね。練習のとき上手と思っ たよ。」(学習面・運動技能)
性格や特徴	・ ところが好きです。	→ 「いつもみんなをわらわして元気にしてくれ るところが好きです。」(生活面・性格)

図 4 「ほめほめカードの書き方」の提示資料

図 5 児童が書いたほめほめカードの内容

【考察】ウォーミングアップ「ほめほめタイム」で場の工夫や教師がデモンストレーションを行い、和やかな雰囲気づくりをしたことで、児童の活動への興味や意欲を高めることができたと思われる。(写真 1) ほめほめカードを書く場面では、生活班にし、お互いの顔が見えるようにしたことで、友達とのいろいろな出来事を思い出すことが容易となり、緊張がほぐれ書く活動がしやすくなったと考える。



写真 1 ほめほめタイムの様子

ほとんどの子がほめほめカードを丁寧に書く姿がみられたことから、ほめほめカードの書き方(図 4)を提示したことにより、友達のよさの視点や文の書き方が理解でき、活動がスムーズにできたと考える。カードの内容は全体的に運動や絵の上手さなど技能に関するもの、学習に関するものに偏っているが、1 学期という集団初期の段階では、友達を技能的な目立つ部分で捉えることは自然であると思われる。2 学期以降、エクササイズの継続的な実施により、徐々に友達の内面的なよさにも気づくであろうと考える。

よさの視点	学習	生活	計
友達への感謝	13	5	18
友達の努力	5	2	7
すごいところ	9	0	9
上手なこと	47	0	47
性格や特徴	1	16	16
その他	1	1	2
計	76	24	100

図 6 ほめほめカードの内容の分類

【手立て2】振り返り用紙の工夫

【結果】短時間で体験を振り返り、自他のよさに気づけるように振り返り用紙を作成した。

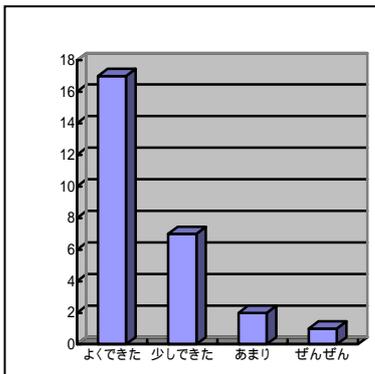


図7 友達のよいところをみつ
けることができましたか

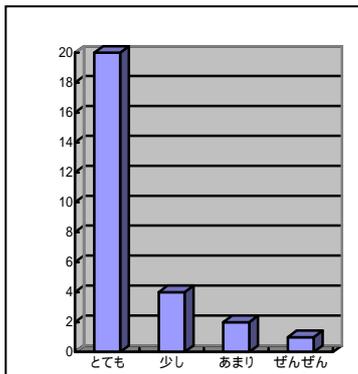


図8 ほめほめカードをもらっ
てうれしいですか

【考察】図7で友達のよいところを見つけることができた児童は、図8のように自分のよいところも肯定的に受け入れることができたと考える。図9の児童の感想にも、認められた嬉しさや自分のよさへの気付き、自分のよさを見つけてくれた友達に対する好ましい感情が伺える。振り返らせることで、より自尊心を高め、貴重な交流体験として心に残すことができたのではないかと考える。

検証2

Q・Uを活用することで児童理解が深まり、学級に合ったエクササイズや児童に合った個別的な指導や援助ができ、認め合い、助け合う人間関係づくりができるであろう。

【手立て1】学級に合ったエクササイズの実施

【結果】学校生活意欲尺度の結果、学校生活意欲得点の学級平均は27.3点から28.2点に上がった。図10の領域別の学校生活意欲得点では、3つの領域全てにおいて増加がみられ、特に「学習意欲」「友達関係」の伸びが大きかった。

図11の学校生活意欲群別の人数では、中意欲児童群が17人から13人に減り、高意欲児童群が9人から13人に増えた。低意欲児童群は児童が入れ替わった。

図12の学級満足度尺度の分布図では、事前と比較すると、非承認群と侵害行為認知群が減少し、学級生活満足群が増加した。分布の状態は、凝集性が高まり全体的に右側に移動した。また、かなり下にあったプロットも上方へ移動した。事前とは別の児童が要支援群に属していた。

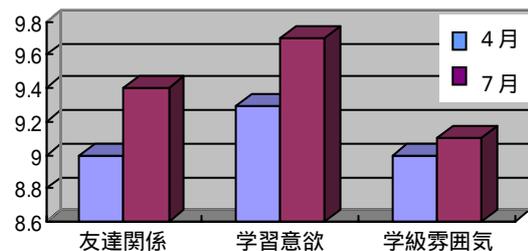


図10 領域別の学校生活意欲尺度の結果

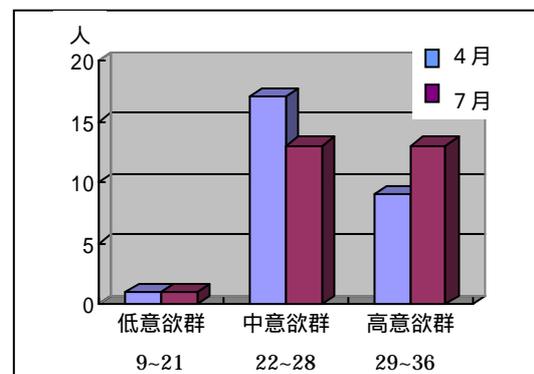


図11 学校生活意欲群別の人数

- ・みんなが書いたほめほめカードを読んでいると、とっても気持ちがよくなった。(肯定的な感情)
- ・初めていいところを書いてもらったのでうれしかったです。(初めて認められた喜び)
- ・自分の知らなかったところを友達が見つめてくれてうれしかったです。(自分のよさへの気付き)
- ・相手は私のいろいろな長所をみているんだなあと思いました。(友達への気付き)
- ・わたしがあげていない人やあまり遊んだりしない人からもらってびっくりしたし、うれしかった。(友達の広がり)

図9 ほめほめカードをもらって
どんな気持ちでしたか

【考察】高意欲児童群が増え、学級生活満足群が3割から4割に増え、プロットも右上方向へ移動したことから、学級を居場所と感じ、意欲的に活動している児童が増えたと考える。

エクササイズの実施により、友達と関わる楽しさを味わい、友達から認められ肯定的に受け入れられることで友達への信頼感が高まり、児童の意欲や満足感が高められたと考えられる。

エクササイズ実施後の児童の感想にも、「男の子も女の子もみんないっしょになかよく遊べたのでよかった」「友達とジャンケンをしたり話し合ったりするのが楽しかった」「めったに言われないことを言われてうれしかった。またやりたい。」という肯定的な感想が多くみられた。

学校生活意欲尺度の「友達関係」の領域が増加していることから、学級内で気の合う友達ができ小グループを形成する集団中期へ移行し始めたと推測される。実態に合った構成的グループエンカウンター体験を通し、ふれあいのある人間関係が育まれたといえるであろう。

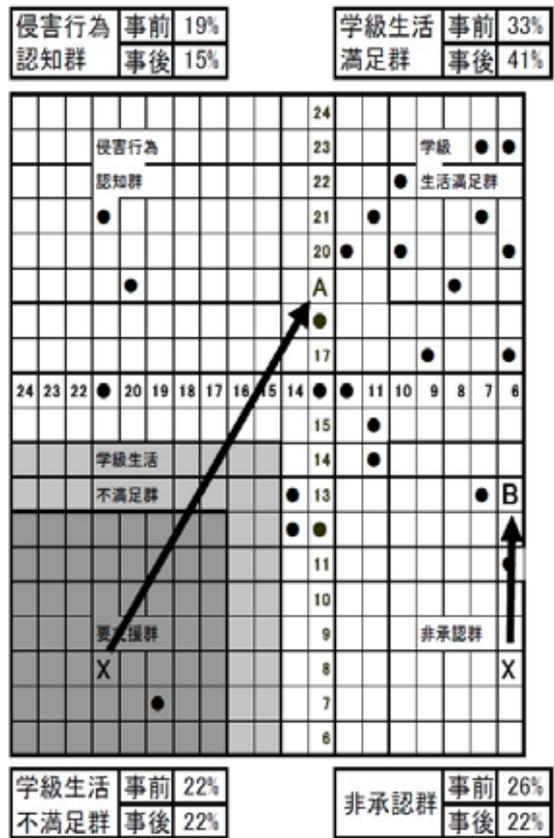


図12 学級満足度尺度分布図(7月)

【手立て2】教師の個別的な支援

【結果】ここでは、事前調査で不満足群と非承認群に属していた児童の事例をとりあげる。(図12に事後の位置をA, B, 事前の位置を×印で示した。)

A児(事前:不満足群 事後:侵害行為認知群, 学校生活意欲得点19点 27点)

	エクササイズ後の児童の感想	教師の個別的な支援
一回	・あんまり人にきらわれているのであまり楽しくなかった。	・Aの不満や気持ちをじっくり聞き、常に味方であるというメッセージを示しながら、言葉かけを行い励ました。
二回	・すわらせないようにしていた人がいたのでおもしろくなかった。	・嫌がらせをする児童にA男の気持ちを考えさせた。 ・Aが頑張ったことをみんなの前でほめるようにした。
三回	・まじめでいいという言葉が心に残った。とてもうれしい。	・発表が上手なAに発表の機会をふやし、発言のよさをほめるようにした。

B児(事前:非承認群 事後:非承認群, 学校生活意欲得点23点 27点)

	エクササイズ後の児童の感想	教師の個別的な支援
一回	・友達のいろいろなことがわかってとても楽しかった。	・教師側からの言葉かけを多く行った。 ・いろいろな友達と活動できたことをほめた。
二回	・ドキドキ、ワクワクして、とても楽しかった。	・みんなの前で大きな声で言えたことをほめた。
三回	・自分の知らないところを友だちがみつけてくれてうれしかった。	・机間指導を行い、よいところほめるようにした。 ・自分から進んで発表できたことをほめた。

【考察】抽出児Aにおいては、教師との1対1の関係を強く求めていると理解し、Aが話しかけてきた時は最後まで話を聞くように心がけ、常に味方であるというメッセージを示すようにしたことが教師への信頼感、学級での安心感を高めることができたと考える。エクササイズにも次第に意欲的に参加できるようになり、発表やデモストレーションの相手などをするようになった。また、教師が学級全体の前でAの発言や積極的な態度をほめることで、周りの児童もAのよさを少しずつ受け入れるようになったと思われる。一回目のエクササイズでAを避けていた児童も三回目のエクササイズではAのカードを自然に受け取る姿がみられた。事前調査の時点ですでにいじめの兆候がみられていたが、早い段階で教師の個別的な支援を行ったことで、いじめの進行をくい止め、友達関係の改善が図れつつあると考える。

抽出児Bにおいては、教師から声をかけ、関わる機会を多く持つようにしたことや小さな頑張りをその都度ほめるようにしたこと、活動への意欲が高まり、友達との関わりにも積極的になってきたのではないかとと思われる。エクササイズの感想にも友達と関わる楽しさを味わっている様子が伺える。最後のエクササイズでは感想を自分から発表するようになった。おとなしく一見特に問題のない児童にみえたBであったが、Q-U調査の結果、Bの内面的な問題に気付くことができ、早期対応につなげることができた。

この2つの事例から、実態把握にQ-Uを活用したことで、問題の早期発見と早い段階で児童に合った個別的な支援を行うことができたと考える。また、互いに教師と子ども、子ども同士の間関係づくりを効果的に行うことができたものとする。

児童の中には、エクササイズの実施に際し、参加態度が消極的な児童や個別的な支援を行ったが学級満足感や学校生活意欲の変化がみられない児童あるいは減少した児童もいた。今後、エクササイズ以外の活動も含めた学級経営の中で継続して実践を深めていきたいと考える。

成果と課題

1 成果

- (1) 構成的グループ・エンカウンター授業を工夫したことで、児童が興味を持って活動し、互いのよさに気付き、認め合う人間関係の育成ができた。
- (2) 学級集団の発達を考慮した構成的グループ・エンカウンター学級経営年間計画案を作成したことにより、意図的・計画的な学級内の人間関係づくりを行うことができた。
- (3) Q-Uを活用することで、多面的な角度から児童理解及び問題の早期発見ができ、児童に合った個別的な支援の方法にもとづいて、早い段階で適切な支援を行うことができた。

2 課題

- (1) 朝の会、帰りの会を活用したショートエクササイズの継続的な実践。
- (2) エクササイズにおけるダメージへの配慮や抵抗を示す児童への対応。

《主な参考文献・引用文献》

- | | | | |
|---------------------------|-------------|----------|-----------|
| 「小学校学習指導要領解説 総則編」 | 文部科学省 | 東京書籍株式会社 | 2004 |
| 「学校経営相談12ヶ月 第6巻 学年・学級経営」 | 高階玲治編者 | 教育開発研究所 | 2002 |
| 「エンカウンターで学級が変わる1・3 小学校編」 | 國分康孝編集 | 図書文化社 | 1996・1999 |
| 「構成的グループエンカウンター事典」 | 國分康孝・國分久子編集 | 図書文化社 | 2004 |
| 「Q-U実施・解釈ハンドブック 小学校用」 | 國分康隆総監修 | 図書文化社 | 2004 |
| 「Q-Uによる学級経営コンサルテーション・ガイド」 | 河村茂雄編集 | 図書文化社 | 2000 |